

よい方たちだったが、共産主義の話になると閉じた口に指を当てて発言を止めたことを思い出す。

二年目、三年目と我々の衣食住環境もよくなってきた、内地の家へ二回ハガキ（赤十字）を出した。（それは家に今もある）返事は受け取らなかったが、戦友に來た返信や日本新聞の記事からして日本国内の事情も察知できた。また順次日本帰還の希望も近づいて心の健康も取り戻すことができた。

民主運動や反軍闘争などにもいろいろと行き過ぎたこともあったと思われる。お互いに日本人同士はもっと同胞愛に燃えて助け合いながら、一人でも多く祖国の土を踏むべきであったと思う。

敗戦という、初めて体験する苦難欠乏の最悪環境下に耐えて幸いに帰ることができた我々として、残る生命のある限り、尊い犠牲となった幾万人もの戦友たちに慰霊の誠を捧げる覚悟である。

昭和二十三年十一月中旬、シベリア抑留より満三年、四度目の冬はありがたい日本の故郷で父母弟妹等と迎えた。そしてお正月を祝うこともできた。入隊までの

二年、関東軍入隊より敗戦の一年間、そしてソ連抑留の三年間、私の青春時代の六年間は日本の激変、激動の世相とともに歩んで終わった。

片川 清氏を偲んで

青森県 工藤 利雄

思い浮かぶままお話し致します。

時は昭和二十年九月と記憶しております。シベリアの東部、ペトロシーの収容所に居た時です。小さな駅、ホームも無い駅で、街と言っても、家並もまばらな村落という感じ、ここに約一年位いました。仕事は山奥に入り伐採作業を主としてさせられていました。

私の隣に枕を並べて寝起きしていた人、片川清という人は、同郷の青森県出身で、年齢は私より二つ少ない三十歳で、大正六年十月生まれと聞いています。そして身長は一メートル六十八センチ（五尺五寸四分）位で、当時、五尺五寸と言えば大型でした。タバコが

好きで、タバコがなければ生き甲斐もないかのように見受ける人でしたが、タバコ（マホルカ）の配給とて、一日大サジ二杯程度しかありません。到底満足する量ではないので、常にタバコを吸わない人から配給分を貰っては吸っていたようです。私たちの伐採作業はとても重労働で、仕事が終わったの帰路は腹がペコペコで、足が前へ進めてくれません。楽しみの食事の量も少なくパン一切れとスूपだけで、腹を満たすためには、草や虫を食べ、また蛙、ネズミ、蛇まで食べたりにしていました。それでも、みな一人残らず栄養失調で、骨と皮ばかりとなり、フラフラの状態が続いておりました。

ある朝「工藤、俺は今日どうしても体の調子が悪くて作業に出られそうもない。担当の者に伝えて来て欲しい」という。私は連絡に走り、休みの許可を貰って来て、片川氏に休むよう申し伝えました。ほとんどの者が栄養失調で、ただ、頑張れるか、そうでないかの差があるだけで、病状にはさほどの差が見られない収容所内の状態です。次々と患者が出てきて、次の患者

も休まされねばなりません。作業人員の割当は連日変わりなく出さねばならず、片川氏も二日休ませてもらったものの、三日目からまた伐採に出るよう命令されたのです。

虜囚の身ではどうすることも出来ません。止むを得ず作業に出ることになったのです。それに先立って片川氏、ベチカの影の暗い所で、みなに隠れて何か食べているらしく、口をもぐもぐさせています。どうやら馬糧の燕麦のようです。麦殻もそのまま呑み込んでいるようです。私は見兼ねて注意しましたが、殻ごと呑み込んでしまつて殻を出そうとしません。誰でも同じことで腹を満たすために殻ごと呑み込みたいのですが、それは身体のことを考えると食べてはならないことなのです。その日の作業中、午後三時頃だったかと思いますが、片川氏は、急に体の不調を訴えてとうとう倒れてしまいました。担当責任者に連絡して、大急ぎで木の枝で担架を造り、四人で担いで収容所に帰り、すぐ連の医師の診療を受けました。診療を済ませて、医師はこの患者の友人は誰かと問うので「ハイ自分で

す」と答えたら「今晚が大事だから用心して看護すること」「患者が眠りかけたら頬などを叩いてもよいから眠らせない様に」と、眠ったからおしまいとのことで、これは大変なことになったと思ったが、一生懸命に見守っていた。言われた通り頬を叩いたりゆすったりしていたが、片川氏、とうとう鼾も高く寝入ってしまった。そして深い眠りに入ったようです。私も自分の手におえなくなり医師に連絡に行きました。夜の十一時過ぎではなかったかと思えます。医師はすぐに来てくれました。「この患者はもうだめだ」と言われて、私は「ドキリ」と心臓のとまる思いでした。何しろ深山の奥地で薬一服も与えられず、もちろん、注射液など思いもありません。ただただ見守るだけです。次々と戦友が駆け込んで来てくれますが、どうすることも出来ません。情けない。みじめな虜囚の患者、夜も更け切った頃、片川氏の心臓の鼓動が遂に止んでしまつた。余りにもみじめで、夜の明けるまで戦友と共に泣き明かしました。

その日、朝から彼の火葬の支度のため私にすべての

責任をまかされました。彼の着ていた服や下着などの洗濯から始めて火葬場の薪の準備。そして十人の戦友等と火葬に取りかかったのですが、何一つお供えする物がありません。タバコが好きだったからみんなから少しづつマホルカを貰い集めて山の草花と合わせて頭上に供え、ただそれだけで茶毘に付したのです。

それ以後私は戦友として遺骨管理の任に当たり、移動の度毎に大切に持ち歩いたのです。私たちの中隊では遺骨の数が三十個以上にもなり預かっている者はそれぞれ丁重に取り扱っていたのですが、それがかえってソ連兵の疑惑をかい「中を見せろ」と強要する。「若しや宝物、時計」移動の度毎に銃口をつきつけられての騒ぎの繰り返しに私も何回かそのような目に遭っておりました。上部の人たちがいろいろ話し合った末、これ以上紛争が大きくなつて「若しものことで預かっている者への迫害があつては大変」と、遺骨を一括してソ連側に預けることに決まり納めることになりました。その数三十柱以上、その後は遺骨の行方すらつかめず、その収容所を移動することになってしまいました。

た。私は片川氏の形見に何かないかと考え使用していた石けん箱を形見としていたのですが、引揚船に乗船する前「決められた物以外は船に持ち込むことを禁ず」で、取り上げられてしまいました。石けん箱一個でも片川氏の遺族の方にお渡しすることが出来れば、それだけでも私の精一杯の行為を認めて許して貰えたらうに。生きて帰って来た私ほどの顔下げて、片川氏の遺族宅を訪れられよう。いろいろ考えあぐんだ末、訪ねて行かないことにしました。今だに申し訳ないような、濟まない気持ちで一杯です。あの抑留当時を思い出す度に毎に、ゾーッとします。二度とあのような苦しみは味わいたくありません。今後、私たちの子供、孫、ひ孫、玄孫に至るまで、あの生地獄の味は絶対に味あわせたくありません、本当に懲り懲りです。

生き地獄のシベリア強制労働

大阪府 近藤 恒雄

国境の街、夜の満州里を失望と不安を満載した列車がシベリア鉄道との接点カリムスカヤの西隣、トリムスカヤに着いたのが二十年十月二十八日夜、日本へ帰れるとわずかな希望も雪の中に降ろされて無惨にも消えた。

以来三年を越える私の強制労働生活が始まったのである。忘れもしない、十二月のある日曜日が私の最初の労働であった。

それは、見たことも聞いたこともない二人挽きの大きな鋸を使って雪中伐採であった。膝まである雪の中、両方から懸命に松の木を切る。ようやく一本切り倒して、痛い腰を雪の上に伸ばし空を見上げた時、辛さからか、望郷からか涙がにじんだ十六歳であった。また作業中、寒さのため靴下二枚、防寒靴下を履いても足